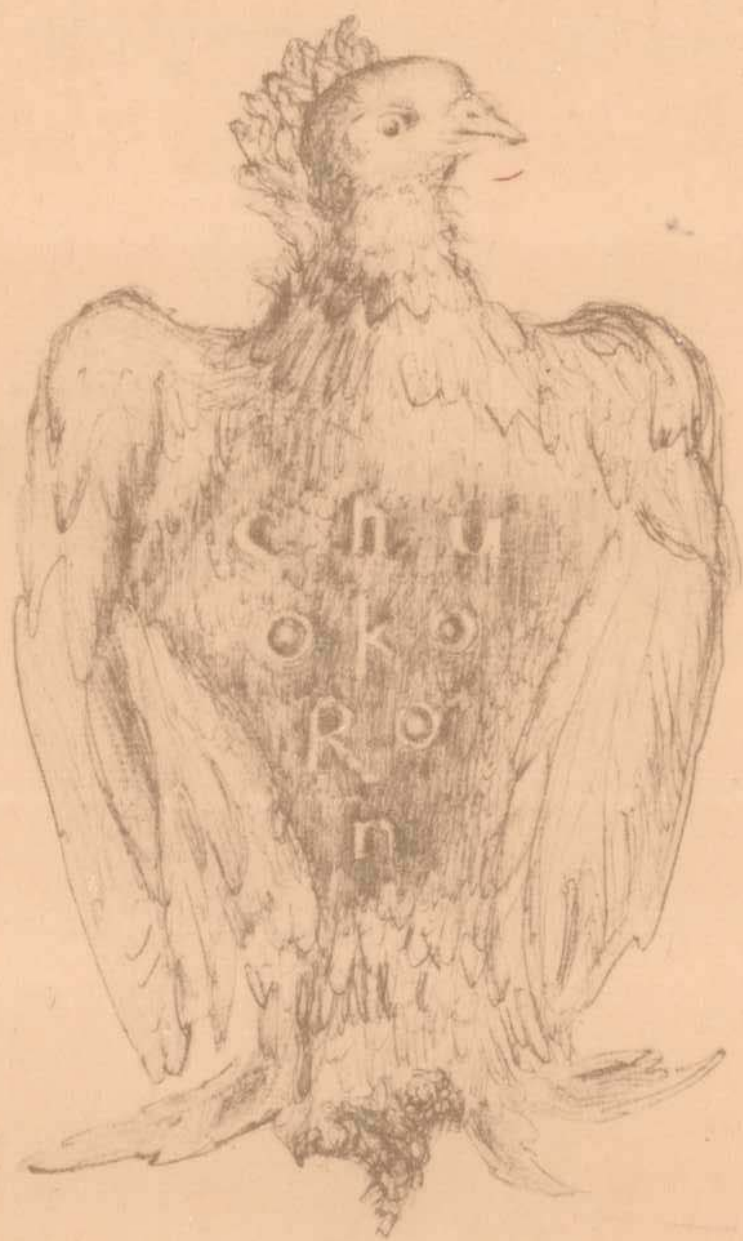




日本の詩歌

別巻

日本歌唱集

中央公論社

中公文庫

日本の詩歌

別巻

日本歌唱集



中央公論社

中公文庫 ©1974

日本の詩歌 別卷
日本歌唱集

一九七四年七月一〇日初版
一九九四年一月二五日10版

発行者 嶋中 鵬二

本文・カバー印刷 三晃印刷
用紙 三菱製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七

振替東京二―二三四

ISBN 4-12-200120-X

Printed in Japan

目次

ふるさとの古謡	5
洋楽歌唱のあけぼの	41
初期創作歌唱	61
明治後期の家庭歌唱	117
明治から大正へ	183
創作童謡と大衆歌唱	225
初期マスコミ歌唱	283
戦時下の歌唱	325
戦後の歌唱	365

日本歌唱史年表

解説

歌いだし索引

園部三郎

400

日本歌唱集

ふるさとの古謡



この章にとりあげた歌曲は、「どじょ
っこ ふなっこ」と「すいすいすっ
ろばし」「田原坂」の三つをのぞくと、
徳川時代からうたわれてきた、日本の
古謡ばかりである。これらの古謡は今
日もまだ、うたわれてはいるが、しか
しそれは全国民から見れば、決して広
い層とはいえない。しかも時には、前
近代的な俗謡としてさげすまれる場合
さえある。それがなぜであるかという
ことを、できるだけ明らかにしたのが、
この歌唱集の一つの目的である。



解 説

「ふるさとの古謡」としてあつめた三十の歌曲は、新しいものでは明治以来、古いものでは江戸時代から今日まで、日本人に親しまれ、うたいつがれてきた全国各地の古謡である。大別すれば「わらべうた」と「民謡」ということになるが、収載歌曲のうち「さくら」と「どじょっこふなっこ」の二曲は、若干の例外歌曲ということになる。

「さくら」は、江戸時代に「琴唄^{ことうた}」として江戸町民のあいだにうたわれはじめたものだから、いわゆる民謡とは少しく異なる。それでは民謡とはいったい何か、という定義をしなければならぬことになるが、ここではその問いに十分答えるだけの余裕がないから、ごくおおざっぱにいうことにする。

民謡の定義については、日本でも欧米でもさまざまな説がなされていて一定しない。あえて誤りをおそれずにいうならば、「民謡とは、一定の郷土地域に住む民衆の誰かが、その生活にもとづいて自分自身で作りだした歌であり、しかもその地域に長いあいだ伝承され、ときにはひろく他の地域にまで伝播^{でんぱ}された作者不明の歌」といえるように思う。



したがって「さくら」のように、作者不明であり、また江戸という特定の地域を中心にしたわかれた歌でも、琴唄の専門家によって作曲されたようなものは、厳密に言えば民謡とはいえない。しかし今日となっては、これが民謡といえるかどうかを論議することとは別に、事実上は民謡ということが許されるほど、一般に愛唱されてきている。

いまひとつ、「どじょっこふなっこ」についても一言釈明しておく必要があるだろう。というのは、歌詞は古く東北民謡にあるものだが、その詞に作曲家岡本敏明が昭和十一年に新しく作曲した、いわば現代歌曲だからである。だから曲の点からいえば、「ふるさとの古謡」に入れるべきではない。しかし現実には、しばしばまちがって「東北民謡・岡本敏明編曲」としてひろく愛唱されており、しかも原詞は既述のように東北民謡であって、そのメロディは岡本氏の新作とはまったく異なりむしろ朗詠風なものであるが、今も秋田地方でうたわれている。そうした意味でここに収めておく。

ところで、従来、かなり多くの歌曲集が公刊されてきており、しかも近年は、それらの多くが、歌詞だけでなく楽譜付きで刊行されている。これは昔からみるとたいへんな変化である。戦前は楽譜をつけてもこれを読める人が少なかったようなこともあって、オタマジャクシを見ただけで、うたうことをやめてしまふような人も少くなかったのである。つまり、昔からの楽譜アレルギーが戦後急速に解消しはじめたのである。そこでこの本では、もう一步すすめて、この



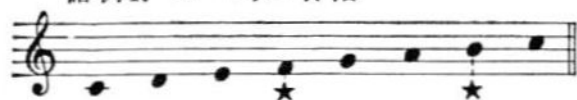
『日本歌唱集』にのせられている各歌曲の性格や種類をはっきりと知っていた
 だくためにも、個々の歌曲の基礎になっている音階と、それについての簡単な
 説明を付しておくことにした。オタマジャクシは苦手だといわれる人も、つぎ
 に掲載する音階の楽譜を、ハーモニカ、オルガン、ピアノなどの楽器をつかっ
 て、まず音にして聞いてみていただきたい。

はじめにド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドという音階（譜例1）であるが、
 これは一般にヨーロッパの音階で、ドからシまで七つの異なった名称の音階で
 できているから、七音音階という。

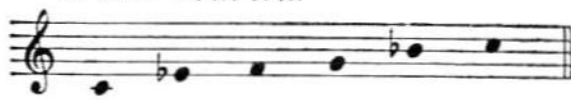
つぎに、このヨーロッパの七音音階からファとシ（譜例1の★印）をとった
 ド・レ・ミ・ソ・ラの五音音階（譜例2）である。これは明治の新学制の施行
 後、将来の日本の国楽の基本音階と定められたものであるが、当時の日本人に
 は、ヨーロッパ七音音階のなかのミ↓ファおよびシ↓ドという半音がないに
 くく、そこでこの二音（当時はファをヨ、シをナといった）をとり、雅楽の呂
 旋法せんぽうといわれる五音音階を国楽の基礎としたのである。したがって、六一ペー
 ジ「初期創作歌唱」の篇以降にこの音階で作曲された歌曲がたくさん出てくる
 こと、そしてまた、この音階はファ（ヨ）とシ（ナ）の半音がないので、ヨナ
 抜き長音階と呼ばれている。

第三は、譜例2と同じく五音音階であるが、ミとラに フラット 記号がついて半音

譜例1. ヨーロッパ音階



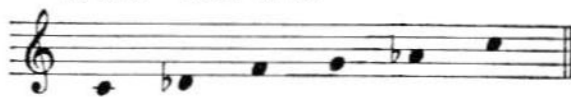
譜例4. 民謡音階



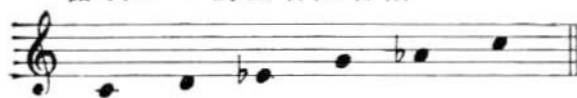
譜例2. ハ調五音長音階



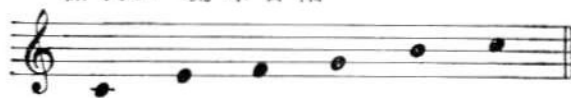
譜例5. 都節音階



譜例3. ハ調五音短音階



譜例6. 琉球音階



だけ低くなっている五音ヨナ抜き短音階（譜例3）である。この音階は、譜例2にくらべて哀愁味を帯びているので軟弱であり、いっぽう長音階はそれに比して明朗健康であるといわれ、学校の唱歌教育ではほとんどつねに長音階が用いられた。しかし、のちに大正期に入ってこの音階が中山晋平によって活用され、現代流行歌謡曲の中心音階となるのだが、そのことは二二五ページ「創作童謡と大衆歌唱」篇で述べることにして、ここでは、「軟弱な女性的音階」として忌避されがちであったということだけを頭においていただければよい。

前述の三種の音階は、今日すでに日本の音階になっているという人もあるが、つぎに以上の三種よりもっと長い歴史をもつ日本の主要な音階についてあげておこう。ただし、譜例2の音階「呂」と同じく、雅楽の音階に「律」という音階があるが、これら雅楽の音階については、五〇ページ「君が代」のところでも若干ふれることとしたい。

譜例4から6の三種の音階は、楽器でひいていただけでは、それぞれ微妙な違いをもっていることがわかるが、譜例4は古くからの日本民謡の基本音階で、譜例5はある種の民謡と江戸時代の俗謡の基礎音階である都節音階であり、譜例6は琉球歌曲の基本音階である。本篇の歌曲をうたわれるたびに、そのつど指示にしたがい各譜例を参照していただければ幸いである。

さくら

日本古謡

さくら さくら

野やまも里も 見わたすかぎり

かすみか雲か 朝日におう

さくら さくら 花ざかり

さくら さくら

やよいの空は 見わたすかぎり

かすみか雲か 匂いぞ出ずる

いざや いざや 見にゆかん

九ページ譜例5の「都節音階」によって作られた琴唄である。この音階は外国人にも魅力を与えるらしく、近年、日本を訪れる外国合唱団も、しばしばこの歌をレパートリーに入れている。国際的日本歌曲の一つ。

さくら さくら のやまも さとーも

み わ た す か ぎーり か す み か

く もーか あ さ ひ に に おーう

さくら さくら はなー ざーかり

江戸子守唄

〈東京〉

ねんねんよい子だ

ねんねしな

坊やはよい子だ

ねんねしな

坊やの子守は

どこへいった

あの山こえて

里へいった

里のお土産に

なにもろた

でんでん太鼓

笙の笛



歌詞は異なるが全国的にうたわれている子守唄である。楽譜には♭記号がついていないが、ミとラに♭をつけると都節音階（陰音階）、♭をつけないでうたと田舎節音階（俗称陽音階）の明るい曲調となる。

中国地方の子守唄

ねんねこしやつしやりませ

寝た子のかわいさ

起きて泣く子の ねんころろ

面憎さ

ねんころろん ねんころろん

ねんねこしやつしやりませ

きょうは二十五日さ

あすはこの子の ねんころろ

宮詣り

ねんころろん ねんころろん

宮へ詣ったとき

なんというて拝むさ

〈中国地方〉

山田耕筰 作曲

ねんねこしやつしやりませ ねたこの - か - わ い

さ おきてなく このねんころろつら

にくさ ねんころろん ねんころろん

ねんねこしやつしやりませ きょうは二十 - 五 - にち

さ あすはこの このねんころろみや

まいり ねんころろん ねんころろん みやへまいった

と き なんというて - お - が む さ いっしこの

このねんころろまめ なよに ねんころろん ねんころろん

一生この子の ねんころろ

まめなように

ねんころろん ねんころろん

中国地方の古謡にもとづく子守唄。都節音階によるが、山田耕筰が新しいリズム感と表情法によって現代化し、全国的にうたわれるようになった。

五木の子守唄

おどんま盆ぎり盆ぎり

盆からさきやおらんと

盆がはよくりやはよ戻る

おどんま勧進勧進

あんひとたちやよか衆

よか衆よか帯よか着物

おどんが打死ちゆうて

誰が泣いてくりよか

裏の松山蟬が鳴く

〈熊本〉

おどんが打死ちゆうたば

道端いける

通る人ごち花あげろ

花はなんの花

つんつん椿

水は天から貰い水

熊本県五木村の古謡。前出の二つの子守唄と同様に、都節音階によっている。檀那衆の家に雇われた貧農の娘の、絶望的な忍従と内心の抵抗をうたったものといわれる。ともすれば、感傷におちいりがちな都節音階が、これほどのふかい悲痛感をもって生かされている曲は、きわめてまれである。



坊さん坊さん

遊戯歌〈栃木〉

(合唱) 坊さん 坊さん どこ行くの
 (独唱) わたしは田圃^{たんぼ}へ 稲刈りに
 (合唱) わたしも一緒に 連れしゃんせ
 (独唱) お前が来ると 邪魔になる
 (合唱) このかんかん坊主 くそ坊主
 うしろの正面だアレ

栃木県足利地方の「人あて遊び」の歌だが、類歌は、全国的に分布している。この歌は、五つの音符からなりたっている。このような歌を「五音歌」という。

♩ = 120

ぼうさん ぼうさん どこいくの
 わたしは たんぼへ いねかりに
 わたしも いっしょに つれしゃんせ
 おまえが 来ると 邪魔になる この
 かん かん ぼうず くそぼうず
 うしろの しょうめん だーれ